

HANDS  **next** 【ハンズネクスト】

とちぎ多文化共生教育通信

発行:宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDSプロジェクト部門

今年度事業および2回の協議会報告

宇都宮大学国際学部長、教授
宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター
副センター長 (HANDS 部門代表)

田巻 松雄

HANDS は、今年度より、従来の文部科学省特別経費プロジェクトから形を変え、国際学部附属多文化公共圏センターの事業として位置づけ直し再スタートを切りました。3月から4月にかけて7回目となる「栃木県における外国人生徒の進路状況調査」を残していますが、他の事業は大体年度当初に立てた計画通りに実施することが出来ました。事業全体（巻末の活動報告も参照）と2回の協議会について簡単に報告するとともに、外国人児童生徒教育に関する昨年の2つの出会いを紹介します。

1 主な事業

- 外国人児童生徒教育推進協議会（栃木県教育委員会 後援）
第1回：9月13日（火）、第2回：1月20日（金）
- 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣（通年）
登録学生52人。派遣依頼14件（2017年1月13日現在実施中11件、終了2件、見合わせ1件）
- 多言語による高校進学ガイダンス2016
1回目：栃木市にて：10月1日（土）、2回目：本学にて10月22日（土）
- 真岡市 AMAUTA（母語保持教室）の外国人児童生徒のための夏休みの課題解決集団学習支援：全4回（7月28日、29日、8月5日、25日）実施、延べ23名の学生が参加
- 子ども国際理解サマースクール：8月8日（月）

～9日（火）宇都宮大学にて、宇都宮市内小学4年～6年生対象（のべ67名参加）

1日目：タイ王国について

2日目：本学留学生（スリランカ・タイ・フィリピン・ラオス・モンゴル）との交流

○授業科目「グローバル化と外国人児童生徒教育」を開講（7年目）受講者約100人

2 協議会報告

「外国人児童生徒教育推進協議会」を2回開催しました。日本語教室が設置されているいわゆる拠点校のある9市1町の教育委員会指導主事と小中学校代表校長に参加して頂いる会議です。1回目は、HANDSが形を変えて再スタートを切ったこともあり、改めてHANDSの目的・目標や取り組み内容を紹介したうえで、現場の状況や課題等を報告いただきながら、幅広く意見交換をしました。また、第6回目の外国人生徒進路状況調査の中間報告をしました。栃木県教育委員会から、初めて、学校教育課小中学校担当指導主事と高等学校担当主事の2人にご参加いただきました。

2回目は、NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ（通称 ME-net）の事務局長であり神奈川県立橋本高等学校の教諭である高橋清樹さんにお越しいただき、「定住外国人の若者の社会参加に向けたグローバル人材育成支援と多文化共生社会に向けて」と題する講演をしてい

いただきました。神奈川県における教育委員会とNPOとの連携に基づく様々な取り組みを紹介いただき、大いなる刺激を受けました。また、文部科学省「学校における外国人児童生徒等に対する教育支援の充実方策について」(平成28年6月)から、特に重要なものをいくつか紹介していただきました。神奈川の現場でも文科省の報告書でも、高等学校における日本語指導・教科指導の内容の改善・充実が大きな課題として認識されていることを強く感じました。HANDSの取り組みも小中学校での就学支援と高校進学サポートが中心になってきましたが、高校にもっと目を向けて行きたいと考えています。このほか、国際学部客員准教授の若林さんから、現在取り組んでいる「教育現場における多言語翻訳支援ツール」についての報告がありました。

3 2つの場との出会い

昨年、外国にルーツのある子どもたちへの教育に関する2つの場との強烈な出会いがありました。1つは、現在、全国に31校存在する公立の夜間中学校です。70年の歴史を持つ夜間中学校は、基本的に何らかの事情で義務教育課程を修了できなかった人を対象にして基礎的な教育を行っています。現在は夜間中学で学ぶ生徒の8割が外国にルーツがあると言われています。

神戸市の夜間中学見学と長年夜間中学で教鞭を執った方へのヒアリングが実現出来ました。もう1つは、NPO法人 多文化共生センター東京です。15歳以上で来日した子ども、もしくは母国で中学校を卒業して来日した子どものほとんどが日本の中学校では受け入れてもらえない状況があるなかで、センターでは、主に10代で来日した外国にルーツのある子どもたちの高校進学をサポートしています。このような場の存在を知る人はわずかであると思います。見えにくい場で外国にルーツのある子どもたちへの教育に熱心に取り組んでいる方々と一生懸命学んでいる子どもたちの一端に触れて、叱咤激励と新たな課題を投げかけられた気がしています。

最後になりましたが、今年度HANDSを支えていただきましたすべての皆様に感謝申し上げます。高橋清樹さんのお話しの中で、学校教育の場で、「外国につながる子どもがいることで・・・大変なことばかり」と思うのか、「面白いことばかり」と思うのか、どちらか?という問題提起が印象に残っています。真意は、おそらく、「大変なことは少なくないけど、大変なことに向き合っていると、実に面白いことが見えてくる」ではないでしょうか。

「多言語による高校進学ガイダンス」

開催報告

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

船山千恵

10月22日(土)午前10時～正午、本学学生会館において「多言語による高校進学ガイダンス」を開催しました。2010年より毎年開催し、今回で7度目の開催です。このガイダンスは、日本語を母語としない子どもたちと保護者を対象にして、日本の教育制度や高校受検に関する情報を正確に提供することを目的に開催するものです。

内容は例年どおり、第1部「言語別テーブルごとのガイダンス」、第2部「全体質疑応答」、第3部「体験談発表」から構成されました。

第1部では、日本語を含む9か国語の資料を用意し、通訳を介して説明しました。親切で丁寧な説明をしてくれる通訳者、その説明に真剣に耳を傾ける外国人児童生徒の保護者、この場に参加者生徒を一緒に連れてきてくれた支援者、

II 活動報告

多くの方に支えてもらっている状況を外国人児童生徒たちは実感している様子が伺えました。

第2部「全体質疑応答」で出された主な質問は、以下の通りです。

- (1) 県立高校と私立高校の併願受検は可能か？
- (2) 海外特別選抜A・B試験について、「3年以内の来日」とは？
- (3) 高校入学後の生活について（授業、部活動、制服、アルバイト等）知りたい。
- (4) 学校選びについて、普通科と専門学科のどちらがよいか？
- (5) 入試制度について、①特別選抜の受検内容は一般試験と同じものか？②英語の資格をもっていたら有利か？

これらの質問に、回答者の先生方に丁寧に答えてもらい、そして通訳者に母語で説明してもらいました。

第3部では、ペルーにルーツのあるアギーレ マリエル ナルミさん（宇都宮大学国際学部1年）に体験談発表をしてもらいました。その内容については、4ページに掲載してあります。外国につながるの児童生徒だけではなく、かれらと関わる教職員の方々にも是非読んでもらいたいと思っています。

参加者からはおおむね好評をいただきました。すなわち、アンケートで、保護者・見学者回答数11人中10人が満足と答え、児童生徒回答数10人は全員が満足と答えてくれました。

昨年度まで、このガイダンスは、本学、真岡市、大田原市または那須塩原市、栃木市で年4回開催してきましたが、今年度は予算的な事情により、本学と栃木市の2回のみで開催となりました。主催として、検討を重ねた結果、真岡市と大田原市・那須塩原市での開催についてやむを得ず見送りました。今年はなぜ大田原市で開催しないのか、真岡市でも開催して欲しかったというありがたいお電話をいただきました。真岡市と大田原市・那須塩原市からでも参加しやすいように、対象児童生徒や保護者への配慮として、本学と真岡市間、本学と大田原市・那須塩

原市間を往復する無料スクールバスを用意しました。これは、初めての試みでしたので、周知も十分だったとはいえ、バスに空席が目立ちました。しかし、スクールバスを運行したことで参加できた児童生徒や保護者もありました。また、帰りのスクールバスの出発時刻まで、学生食堂で参加者やHANDS Jrの学生たちと昼食をともにとりながら歓談できたのは、双方にとって有効であったと感じました。地域で開催できることが子どもたちにとって一番だとは思いますが、そのためには、費用というクリアすべき避けられない問題があります。

今回初めての試みが4つありました。毎年日曜日の午後に開催してきましたが、今年は「土曜日の午前に開催」、参加者送迎のための「無料スクールバスの運行」、事後昼食を各自とりながらの「参加者との交流」、大学進学についても説明して欲しいとの声に応えた「大学進学相談」です。この土曜日には、多くの中学校で学校祭が開催されていて、日程について改めて検討する必要性を感じました。「大学進学相談」には、2家族の参加があり、かれらの高い意識を高等教育までつないでいくことも大学に求められた地域での重要な一つであると気づかされました。地域開催の実施に向けて、各自治体と費用負担の考え方の共通理解を求めるときも含め、これら4つの点もあわせて、地域の教育委員会担当者の方々等、関係者の意見を参考に考えるべき来年度の課題かと思えます。

参加者に「このガイダンスに来て良かった」と思ってもらい、明日からの学習意欲につなげ



てもらい、そして、高校進学など近い将来に向けて家族や学校の先生と話し合ってもらえたら、と思いながら準備してきました。今回も翻訳者・通訳者をはじめ、各市教育委員会、各小中学校長、教職員、支援者等、多くの学外関係者の協力を得て開催することが出来ました。外国人児童生徒教育支援に強い関心を示す学生団体 HANDS Jr の協力も忘れてはなりません。昨年までの4会場開催から今年は2会場開催となった分、本学で開催したガイダンスへの参加児童生徒数が

倍増し、その結果、急遽通訳を依頼することになった協力者、学生の皆様には、ご理解に感謝いたします。ご協力いただきましたすべての方々

に厚く御礼申し上げます。

「受検について何も知らず、不安でしたが、希望が持てました」とアンケートに英語で回答してくれた参加生徒、「子どもが好きだからはいくしになりたいです」と日本語でがんばって記入してくれた参加生徒。子どもたちの夢が実現しますよう心より願っております。

外国人であること

宇都宮大学国際学部1年

アギーレ マリエル ナルミ

外国人であること。私は、外国人であることに恥ずかしさを持っていました。正直に言えば、自分が外国人であることが嫌でした。外へ出るたびに偏見をもったような目で見られ、私の方を見ながらこそこそ何かを話す。その場から逃げたいほど、嫌になったのを覚えています。そのくらい、自分が外国人であることが嫌だったのです。

日系ペルー人の父と、ペルー人の母の間に生まれた私は、日本で生まれ、日本で育ちました。保育園、小学校、中学校、栃木県内の県立高校と日本人と変わらず成長をし、生活をしてきました。幼い頃から内気だった私は、人前に出ることや、話すことが苦手で、とにかく目立つことが嫌いでした。小学生になり、新しい環境へと飛び込んだ私は、自分が外国人であることを気にし始め、同時に少し心細くなりました。なぜなら、周りのみんなが日本人で、自分だけが外国人であったからです。いじめを受けていた訳ではありません。しかし、なぜか仲間はずれにされたような気持ちになったのです。自分が生まれ育った国であるはずなのに、なんとなく自分がよそ者であるかのような気がしたのです。それから私は、外国人であることに恥ずかしさを持ち、自分を隠すようになりました。周りとの違いを受け入れることができなかったのです。

しかし、そんな私は、ある人との出会い、言葉をきっかけに、変わることになりました。そのある人とは、私が中学校二年生だった時の担任の先生でした。クラス担任を務めるのは初めてということを知り、自分のような生徒を受け入れてくれるのか不安でした。そんな私を助けてくれたのがスタンダードダイアリーという一冊の日記のようなものでした。毎日欠かさずその日記を書き、そのたびに、先生がコメントをしてくれました。最初は、その日の出来事だけを書いていました。しかし、書いているうちに、だんだんと先生に心を開くようになり、悩みを打ち明けるようにもなりました。どんなことでも真剣に話を聞いてくれる先生を、少しずつですが私は信用するようになりました。そんな時、先生がある言葉をくれました。それは、「二つの国を大切に思えることは、とても素敵なことです。自信を持って自分を表現していきましょう」という言葉でした。今まで、自分を隠していた私をまるで知っていたかのような、そんな言葉でした。

私は、この言葉をきっかけに、外国人であることへの恥ずかしさを少しずつ持たなくなり、むしろ誇りを持てるようになりました。もっと自分を出そう、自分に自信を持とう、そう思えるようになったのです。それから、積極的に人前に出たり、いろんな人と関わるようになり、自分の中で

II 活動報告

の世界が広がったような気がしました。

外国人であること。決して恥ずかしいことではありません。母国を出れば、誰でも外国人なのです。偏見を持った目で見られることは、今までと変わらずあると思います。しかし、何よりも伝えたいことは、自分と同じ立場である外国人児童生徒の皆さんには、外国人であることを、決して消極的に捉えてほしくないということです。周りとの違いを一つの個性として前向きに捉えることには時間がかかります。私自身、

完全に前向きに捉えることができていないのですから。しかし、様々な経験を通して、いろんな壁にぶつかって、達成することで克服することができるのです。だから、「外国人だから…」という理由で立ち止まってほしくないのです。私自身の財産である経験を活かし、ただひたすら前へ前へと進み、将来につなげていくことが皆さんの原動力になればと考えています。

日本で外国人として生きていくことは、私にとって旅であり冒険です。

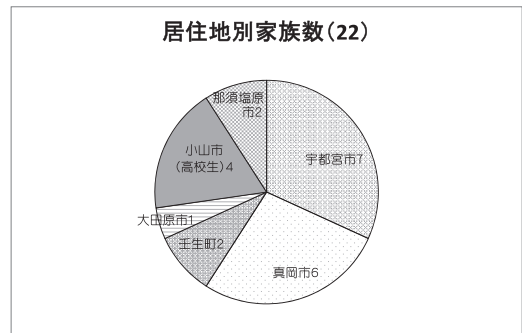
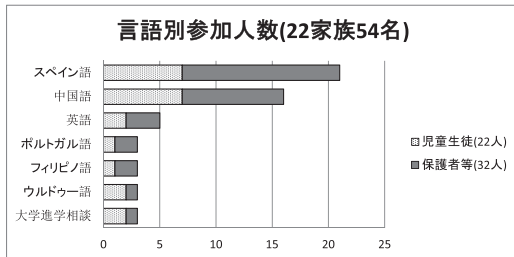
アンケートより参加者からの感想（抜粋）

【保護者より】

- ・ 私たち外国人に心配をしてくださってありがとうございます。
- ・ ためになりました。ガイダンスを継続してほしい。
- ・ 高校入学のシステムについて多く学ぶことができました。
- ・ 申し込みを忘れて急に来たが、対応していただき感謝。連れてきた高校生が通う高校は、今日対応してくれた宇大の大学生の出身校で、色々と話が聞けた。

【児童生徒】

- ・ 海外特別選抜について、いろいろ聞きたいことを質問できて、回答をもらえました。
- ・ 今日、高校のシステムや高校生活についての疑問を全て解消できました。冷静に高校を選ぶことについても考えることができました。
- ・ いろんな高校について分かりました。みんなすごく優しくて熱心に質問に答えてくれました。
- ・ もっと自分の特徴を深められる（今後の選択を広げられる）ような学科を、英語や日本語でもっと調べてみようと思います。



本学における多言語による高校進学ガイダンス(2016.10.22)関係者・協力者一覧

	名前	所属等	当日の主な役割など
1	田巻松雄	宇都宮大学国際学部長、HANDS部門代表	全体責任者、はじめのことは、大学進学テーブル
2	スエヨシ アナ	国際学部准教授	スペイン語通訳
2	立花有希	国際学部講師	質疑応答進行役
4	若林秀樹	宇都宮大学国際学部客員准教授	質疑応答者
5	原田真理子	佐野市日本語指導助手	通訳 ポルトガル語

6	佐藤和之	真岡市立真岡東小学校教諭	質疑応答者
7	津久井文	宇都宮市教育委員会学校教育課 指導主事	質疑応答者
8	鈴木則子	宇都宮市教育委員会学校教育課 指導主事	質疑応答者
9	小林忠教	栃木県国際交流協会事務局長	終わりのあいさつ
10	渡辺美千恵	栃木県立真岡女子高等学校教諭	質疑応答者
11	山中亮	小山市立旭小学校教諭	質疑応答者
12	アギーレ マリエル ナルミ	国際学部1年	体験談発表者
13	市川 恭治	社会人	フィリピン語通訳
14	田村 晶子	栃木県国際交流協会	スペイン語通訳
15	鄭安君	白鴎大学総合研究所研究員	中国語（台湾）通訳
16	植田エレニセ	社会人	ポルトガル語通訳、県北バス担当
17	高山由貴	小山市外国人児童生徒支援員	スペイン語通訳、書記
18	船山千恵	多文化公共圏センター職員	運営全般
19	薄根真弓	宇都宮市立御幸小学校教諭	後期内留生（ポルトガル語）
20	澤田洋子	小山市立寒川小学校教諭	後期内留生（ポルトガル語）
21	チョードリ亜美奈	国際学部3年	ウルドゥー語通訳
22	櫻井萌子	国際学部2年	スペイン語書記
23	中川深喜	国際学部1年	スペイン語書記
24	大城明美	国際学部2年	スペイン語通訳
25	染谷心	国際学部1年	スペイン語通訳
26	森島光太郎	国際学部1年	スペイン語通訳
27	ロニー ヴァルガス	国際学研究科前期2年	スペイン語通訳
28	オルティス ゆみこ	国際学部4年	スペイン語通訳
29	木下レナト	国際学部2年	スペイン語通訳、真岡バス担当
30	椎名史織	国際学部2年	タイ語通訳
31	須田舞華	国際学部1年	フィリピン語書記
32	小野寺まゆみ	国際学部3年	フィリピン語通訳
33	THAN THI MY BINH	国際学研究科後期	ベトナム語通訳
34	HOANG ANH	国際学部1年	ベトナム語通訳
35	DAO YEN LINH	国際学研究科前期1年	ベトナム語通訳、書記
36	佐藤乃巴桂	国際学部4年	ポルトガル語書記
37	谷口ジェニフェ	国際学部1年	ポルトガル語通訳
38	大城フラビア	国際学部2年	ポルトガル語通訳、県北バス担当
39	渡邊翼	国際学部3年	英語書記
40	大川裕	国際学部2年	英語通訳
41	岩上享子	国際学部1年	英語通訳
42	金澤芽以	国際学部1年	台湾語書記
43	遠藤さくら	国際学部4年	中国語書記
44	伊藤寛恵	国際学部1年	中国語書記
45	鄭全嬌	国際学研究科前期2年	中国語通訳
46	李明昊	岩手県立大学1年	中国語通訳
47	駱蓉	国際学研究科前期1年	中国語通訳
48	周 陽慧	国際学部4年	中国語通訳
49	韓雯婷	国際学研究科前期2年	中国語通訳
50	田中静美	国際学部3年	中国語通訳
51	王希璇	国際学部1年	中国語通訳、書記
52	菅原笑	国際学部2年	司会
53	菲澤怜子	国際学部1年	司会
54	新屋明夫	国際学部4年	受付・会場設営・撤収・案内係等
55	丹治真奈	国際学部4年	受付・会場設営・撤収・案内係等
56	三浦拓也	国際学部4年	受付・会場設営・撤収・案内係等
57	行本大誠	作新大学3年	受付・会場設営・撤収・案内係等
58	桑田梢	国際学部4年	受付・会場設営・撤収・案内係等
59	斎藤柊奈	国際学部4年	受付・会場設営・撤収・案内係等、 県北バス担当

多言語による高校進学ガイダンス（地域開催）のまとめ

1 開催地	栃木市
2 開催日時	2016.10. 1（土）14時～16時
3 開催場所	栃木市役所正庁
4 共催	栃木市教育委員会、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDS部門
5 参加家族数（言語別）	4家族（スペイン語2、フィリピン語1、中国語1）
6 体験談発表者の背景	アギーレ マリエル ナルミ：ペルーにルーツ、宇都宮大学国際学部1年
7 質疑応答者数	栃木市教育委員会指導主事1、小学校教員1、国際学部客員准教授
8 協力者数（7を除く）	通訳5+栃木市教委学校教育課長+栃木市教委指導主事5+大学関係者3+運営協力学生3
9 主な質問	<ul style="list-style-type: none"> ・奨学金について。 ・高校入学後にかかる費用について。 ・県立高校の入試のしくみについて。 ・特別措置について。 ・効果的な学習法とは。
10 参加者アンケート および事後感想から	<ul style="list-style-type: none"> ・自分もアギーレさんと同じように小学生の時に外国人だということに恥かしい思いを持っていました。でも中学生になってフレンドリーになれて、またアギーレさんのように自分に自信を持てるようになっていたので今日のガイダンスで学んだことを生かしてもっと自信を持ちたいです。 ・日本語だけでなくスペイン語で情報をもらうことでより高校についてわかった。



平成28年度子ども国際理解サマースクール報告

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

船山千恵

1. 事業の目的・意義

2016年8月8日と9日の2日間、宇都宮市教育委員会東生涯学習センターと国際学部附属多文化公共圏センター HANDS プロジェクト部門の協働で「子ども国際理解サマースクール」が行われました。本事業は、HANDSとしては7度目となる多文化共生教育実践です。

受講者は、宇都宮市内の小学生4年生～6年生で、今年は、第1日目33名、第2日目34名、のべ67名の小学生たちが参加しました。

第1日目の目的は、毎年、一つの国や地域をテーマに取り上げ、子どもたちの目を世界に向けるきっかけづくりで、第2日目の目的は、宇大生の学生団体 HANDS Jr や宇大留学生などの企画・支援のもと、かれらと直接交流しながら、参加小学生たちの国際感覚を養うことです。

2. 事業内容

(1) 参加型講義

第1日目：8月8日10時～12時

テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう 2016
～タイ王国編～」

(2) 国際交流

第2日目：8月9日10時～14時

テーマ「世界を感じよう 2016
～宇大留学生たちとの交流～」

3. 事業の進捗状況

(1) 第1日目

テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう 2016
～タイ王国編～」

参加小学生33人、宇大生23人（HANDS Jr等12人、田巻ゼミ生5人、タイからの留学生6人）

ゼミ生とタイからの留学生が中心となって、タイについて学びました。

まずは、アイスブレイクとして、名札に自分の名前をタイ文字で書いてみました。漢字とは全く異なる文字に、みんな真剣でした。その名札は、記念に持ち帰りました。

2つ目のアイスブレイクとして、タイ語のカルタ取りをしました。「にわとりのゴー ก」「子どものドー ด」「カメのトー ต」「魚のポー ป」などと書かれたカルタで遊びました。

次に、タイ語でドラえもんの主題歌を歌いました。何度も練習をして、「アン アン アン ラック ドラエモン ティー スッド ローイ」(アン アン アン とっても大好き ドラえもん)と最後には楽しく歌えるようになりました。

そして、タイの子どもたちの遊びをしました。1つ目は、「เสือกินคน สวากินคน」という鬼ごっこです。安全なエリアの草原から、人食い虎がいるエリアをとおって反対側の草原まで、人食い虎役にタッチされずに進みます。タッチされた人は、人食い鬼役になりますので、どんどん虎が増えて、通りにくくなります。2つ目は、「ควาลูกโป่ง クワールークポーン」という風船リレーです。グループ対抗で、風船をバトン代わりにし、その風船をフライ返しやほうきなどを使って転がして、一周して戻ってきたら、次の人へ交代するリレーです。これら2つの歓喜にわいた遊びをとおして、タイの同年代の子どもたちの遊びに触れ、また、小学生たちは、今日初めて会ったとは思えないほど、別の小学校に通う参加小学生と友好を育み、地域の大学生

や留学生たちと交流することができました。

最後は、田巻ゼミ生とタイの留学生たちによる脚本・出演による劇を2つ観覧しました。

1つ目の劇は、日本からお父さんの仕事の都合でタイに引っ越してきてタイの小学校に通うことになった晴香ちゃんが、タイの小学校で体験する異文化について紹介する劇です。晴香ちゃんのお父さん役には、田巻が演じました。タイでは、先生への宿題の提出には、右手だけで手渡すこと、国歌を歌う時間が朝の8時と夕方の6時に一日2回あること、休み時間にはみんなで牛乳を飲む時間があること、時間割にお坊さんによる仏教の授業があること、国王の誕生日の12月5日は国民は黄色い服を着て町に出て祝福するから宮殿の広場はたくさんの国民によって黄色に染まること等を、劇で教えてもらいました。補足説明は、スライドを使って留学生がわかりやすく解説しました。

2つ目の劇は、「晴香ちゃんとお坊さん」というタイトルで、タイの人々の心や生活の中にあるお坊さんへの畏敬の念について表現してくれました。タイの人々は、仏教を崇高なもの、そしてお坊さんを偉大な人と考えていることがよくわかりました。タイ語でタンブンという托鉢の場面では、女子の大学生が坊主頭のかつらをかぶりお坊さんの役になり、小学生たちは、そのお坊さんに食べ物などを差し上げるタンブン体験をしました。どんなものでもありがたく受け取らなくてはいけないお坊さんたちの肥満傾向についても解説がありました。日本では、公共の乗り物には、お年寄り、妊婦、障がいのあ



II 活動報告

る方々等に優先席がありますが、劇の中でのバスのシーンで、タイにそれらに加えてお坊さん専用の優先席があることを知り、みんな驚いていました。

最後に、タイの民族衣装を希望者に着てもらい、みんなで集合写真を撮影しました。



(2) 第2日目

テーマ「世界を感じよう 2016

～宇大留学生たちとの交流～

参加小学生 34 人、宇大生 27 人 (HANDS Jr 等 17 人、留学生 10 人)

本学には、世界の 33 の国・地域から 244 名の留学生在が学んでいます (本学学務部留学生・国際交流課調べ、2016 年 5 月 1 日現在)。今回は、9 つの国や地域出身の 10 名の留学生に協力を依頼しました。9 つの国や地域とは、コスタリカ、ラオス、中国、モンゴル、ベトナム、タイ、ネパール、フィリピン、スリランカです。昨年に引き続き今回も、コスタリカ出身の留学生ロニーホセさんが中心になって、ラオス、モンゴル、ベトナム、ネパール、フィリピンの 5 つの国や地域を中心に学ぶ交流内容を何日も何日も考えました。加えて、特にこの日のために、HANDS Jr という外国人児童生徒教育支援や国際理解活動に強い関心を持つ学生団体が熱心に企画・準備・運営しました。以下の 5 つの活動を中心に交流することができました。

①アイスブレイク

「新聞紙を使って AMIGO !」

まず児童を 5 つのグループに分け、広げた新

聞紙 1 枚に各グループ何人乗れるか、全員が乗れるかを競い合います。普通に起立しただけですと、3 人くらいしか紙に乗ることはできませんが、「抱っこしよう」「おんぶしてみよう」などと、コミュニケーションをはかりながら協力することを学びます。中には、嬉しそうに留学生に肩車してもらっていた小学生もいました。「じゃんけん列車で 1 2 3」

英語でじゃんけんして、負けた方が、勝った人の後ろに回って、肩に手を乗せます。勝った人は対戦相手を見つけ、また英語でじゃんけんします。それを繰り返していくと、最後には、全員による大きな輪ができます。「Rock, Scissors, Paper. One, Two, Three!」というじゃんけんが会場のあちらこちらで繰り返され、勝った方の歓声が大きく響いていました。

「世界の国のコンニチハ」

3 名の留学生から母語 (ネパール語、タイ語、スペイン語) でのあいさつを学びました。例えば、ネパールのステイブさんには、あいさつ「ナマステ」の方法を教わりました。「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」、これらすべて「ナマステ」一つで済むようで、その際にする深いお辞儀の仕方を教えてもらいました。

②交流ゲーム A「スプーンレース」

手に持ったスプーンにピンポン球を乗せて 10 メートルの距離を往復するグループ対抗レースです。ピンポンの“バトン”が渡ると、落とさないように慎重になりつつも、どのチームも 1 位を目指してゴールまでがんばりました。

③交流ゲーム B「ピックザボール」

まず、児童たちは指示だしワークシートで、各言語での指示の言い方を学びます。先述の 5 つの国や地域の言語であるラオス語・モンゴル語・フィリピン語・ネパール語・シンハラ語 (スリランカの言葉) で、「前」「後」「右」「左」「止まれ」「前に進め!!」「後ろに下がれ!!」を学習しますが、普段耳慣れない言語に悪戦苦闘していました。その後、学習したそれらの言葉を使ってゲームを始めます。目隠しをした各グ

ループの代表留学生に各言語（チーム別）で指示を与え、スタート位置から10メートル先の円の中にあるボールを拾い、スタート位置にあるカゴにまでそのボールを入れます。できるだけ多くボールを制限時間以内に入れられるかを競います。4色あるボールの色で得点が変わりますが、留学生は目隠ししているのです。各言語での指示の正確さが得点を大きく左右します。



④国際理解ゲーム「4 Corners Quiz」

パワーポイントを使って、留学生の出身国ごとに4択クイズを出題しました。日本との位置関係についての出題やその国で有名な料理を選ぶクイズなど、留学生たちが用意した問題が出されました。児童が正解だと思う答えのコーナーに移動してもらい、正解を発表し、留学生による補足説明を行いました。例えば、「この中から、日本が最も多くフィリピンから買っているのはどれでしょうか？」の問いに、「A: ヤシ油、B: マンゴー、C: マグロ、D: エビ」から答えを選び、A だと思ふ人はAのコーナーに行きます。当たれば、のちにポイント換算するシールをもらえます。すぐにわかってしまう問題もあれば、私

たち大人もどれだろうと少し悩む問題もありました。

閉校式では、宇都宮市東生涯学習センターの水沼栄所長と宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターの田巻松雄副センター長よりあいさついただきました。解散後、留学生たちに駆け寄ってあいさつしたり、握手をしたり、別れを名残惜しそうにしていた児童たちを見て、この交流の目的を達成できたのではないかと思います。

4. 事業の成果

参加小学生からは、本スクールに対して概ね高い評価が得られました。アンケート結果の内容等から、タイ王国をテーマとする参加型授業と本学留学生との交流事業に参加したことで、参加小学生の国際的な関心や国際感覚が大いに増大したと判断されます。また、本学留学生と日本人学生は本スクールの企画・運営を担ったことで、実践的な国際理解教育を推進する力を向上させました。参観いただいた保護者の方々からも非常に有意義なイベントだとの評価をいただきました。



5. 今後の展望

国際的な視野や感覚を養い、多文化共生教育実践は初等・中等教育で益々重要となっております。しかし、学校単独での教育実践はなかなか進んでいないのが実情です。従って、このようなスクールの重要性は極めて高いと言えます。今回も、本スクールへの参加希望者は定員を大

II 活動報告

きく上回り、抽選をせざるを得ない状況でした。そして、参加者からは概ね高い評価を得てきました。リピーターも何人か出ています。この大きな理由は、学校現場での国際理解教育がまだ少ないことに加え、本スクールでは、大学と行政が協力連携しながら何度も協議を重ねて用意周到に計画を立て実施してきたことにあります。また、近年、小学校でも英語教育が取り入れられ、アメリカをはじめとする英語圏の異文化理解や交流は進んでいるものの、英語圏以外、とりわ

けアジアの文化に目を向ける機会にはあまり恵まれていない小学生にとって、国際的な問題関心と国際感覚を養う貴重な場となっており、参加大学生にとっては実践的な国際理解教育を経験する貴重な場となっています。国際学部の学生・大学院生、留学生と学生団体 HANDS Jr の人的資源等を活かした効果的な地域貢献・人材育成事業となっており、今後も継続的に実施していきたいです。

サマースクールを終えて

第1日目担当：宇都宮大学国際学部3年

小泉晴香

在留外国人の数2,765,267人（2016年6月末現在）、宇都宮市内に在住する外国人の数8,097人（2015年末日現在）。私たちの周りにはたくさんの外国人が生活している。しかしかれらと出会い、関係性を持つ子どもたちは決して多くない。私たちの講座には6人のタイ人留学生が協力してくれた。日常生活ではなかなか出会うことのない外国人たちに出会えたことは子どもたちにとって貴重な経験となっただろう。

またタイ人留学生たちは私たちにとっても嬉しい存在であった。私たちが講座の話を受けて第一に不安だったのが、私たち自身がタイという国のことをあまりにも知らなかったことだ。多忙な学校生活を送るかれらと連絡を取り合い共に作業を進めることは困難なこともあったが、かれらのおかげでより忠実にタイの文化を子どもたちに伝えることが可能となった。さらに懸念していたのが子どもたちの反応だ。現代の小学生たちが果たして私たちの考えた講座内容を楽しんでくれるだろうか、積極的に参加してくれるだろうかと不安を感じながらの準備作業であった。しかし子どもたちの反応はいい意味で私たちの予想を裏切ってくれた。特にタイ語の

カルタ取りやタイの遊びでは、子どもたちが大きな声を上げながらはしゃぐ姿を見ることができ一安心であった。それに加えて日本と異なるタイの文化をテーマにした寸劇も食い入るような目で見てくれ、こちらの演技にも力が入った。

子どもを対象とする講座の企画・運営は初めての経験であったため、当初は不安のほうが大きかったものの、終わってみれば私たちにとってもタイの文化を知る良い経験となっていた。冒頭で書いたように子どもたちが外国人や外国の文化に触れる機会は少ない。サマースクールは単発で、さらに休憩も含めて4時間しか開催できないという点においてはタイの豊富な魅力を伝えるには限界がある。しかし海外の生活や異文化に興味を持つきっかけを与えるという点においては素晴らしい効果を発揮するだろう。国際学部を有する大学として地域の子どもたちへ異文化に触れる機会を提供することは地方の大学としての大きな役割である。今後も世界中の国をテーマにしなが、宇都宮に住む子どもたちへ異文化や多様性の素晴らしさを伝えていきたい。

シリーズ:学生ボランティア派遣体験記18

外国人児童生徒支援の難しさと
ボランティアをすること

宇都宮大学国際学部2年

椎名史織

私は、昨年の5月から、栃木県大田原市の小学校で、日本に来たばかりの小学5年生の女の子の支援をしています。来日間もないということもあって、彼女はほとんど日本語を話すことが出来ませんでした。また、学校にタイ語が分かる先生もいないという事で、私に声がかかったのです。しかし、支援と言っても、日本語の授業を持っている訳でも、特定の授業科目を教えるわけでもありません。支援の方法は、毎週火曜日の2時間目から昼休みまで、他の日本人児童と同じ教室で行う「入り込み授業」です。授業中は、担任の先生の指示のもと、皆と同じように問題を解かせてその解決に支援してみたり、それが日本語の能力的に難しい場合は、児童に合った別の課題をするのを見守ったりしています。私は常に彼女の横にいて、訳せるところはタイ語に訳して説明をします。しかし、学習の中で使う言葉をタイ語に訳すことは私にはとても難しく、何とか出来る範囲で訳しても「分からない」と言われてしまう事も多くて、何度も自分の無力さを実感しました。その他、休み時間や指定された時間の中で、学校生活や友達との関係について話を聞いたり、学校で行事などがあれば、その説明をしたりしています。

私は、高校生の頃にタイに一年間留学していたことがあり、日常会話程度なら少し話すことが出来ます。しかし、留学してから時間が経っているので、あまり自信はありませんでした。実際に、日本語をタイ語に訳して理解してもらうという作業はとても難しく、帰り際に、今日もまた上手く伝えられなかったと後悔することも少なくありません。それでも、小学校の先生方が、彼女の友達のような存在で良い、身近に一人でも言葉や気持ちを伝えられる人がいると

いうだけでも彼女にとってはありがたいだろう、と言って下さることが励みになっています。

私が普段の支援の中で気を付けていることは、タイ語で話が出るからと言って、私とばかり話す事がないように、周りのクラスメイトと彼女の会話や関係も大切にするという事です。一見、彼女は日本語がまだ上手くは話せない中でも、明るくクラスに馴染んでいるように見えますが、以前、友達との関係はどうか、友達といて楽しいか、という質問をした時に、やはりもう少し日本語が話せたらもっと楽しいと思う、と言っていたことや、彼女のノートに時折見えるタイ語が普段は見せない彼女の本音なのだということを思うと、やはりまだまだ課題は残されていると感じます。

今回の支援は、私にとっては初めての長期、そして外国人児童生徒を対象にした支援で、まだまだ分からないことが沢山あり、自分の力不足を実感するばかりです。しかし同時に、日本にいる外国人児童生徒を取り巻く現実や、支援・ボランティアの難しさも少しではありますが学ぶことが出来ました。今後も、ボランティアという立場で出来る範囲で、自分が出れることを最大限に探し、少しでも彼女の役に立ちたいと思っています。彼女に日本に来てよかったと思ってもらえるように頑張ります。



アマウタ 「AMAUTA」の子どもたちから学んだこと



宇都宮大学国際学部 4年

齋藤 柊奈

外国人児童生徒を支援する HANDS の活動に興味を持った私は、大学1年のときから真岡市のスペイン語母語保持教室「AMAUTA」で、子どもたちの学習支援に参加してきました。通常、この教室では子どもたちの母語であるスペイン語を忘れさせないための活動が、子どもたちのご両親を中心として行われています。私たち学生ボランティアは、子どもたちの夏休みの宿題を手助けするために毎年、夏に訪問することになっています。

初めてこの活動に参加したときのことは、今でも鮮明に覚えています。私自身とても緊張していて、子どもたちとうまく会話できるかどうか不安でした。あいさつ程度のスペイン語ではありましたが、子どもたちとの距離を少しでもなくしたいという思いから学習支援を行う前日はスペイン語の練習をしました。しかし、実際に子どもたちに会ってみると、かれらは日本語でのコミュニケーションに支障をきたすことはありませんでした。私たちを笑顔で迎え入れてくれる子どもたちのおかげで、緊張や不安は、いつのまにか消えていったことを覚えています。

私は、小学校4～6年生に学習支援を行っていました。担当した子どもたちは明るく元気で、

学習支援ではありましたが、毎回楽しく活動することができたと思います。一方で、教えること、人に何かを伝えることの難しさも改めて学びました。子どもたちの中には、日常会話としての日本語に不自由がなくても、学習のための日本語になると理解に苦しむ様子が見受けられました。そのような子に対して、どのように教えたらよいのか、どうすれば分かりやすくなるか、とても悩みました。

そうして試行錯誤しながら学習支援をしているうちに、私は AMAUTA の子どもたちから学んだことがあります。それは、人と接するときには1つの考え方にとらわれてはいけないということです。日本語がわからないから学習に支障をきたしている、外国人児童生徒であるからできない、このような理由だけで彼・彼女らと接することはあまりにも理解に乏しいと思います。子どもたちの背景には何があるのか、今どのようなことに興味を持っていて、何に対して悩んでいるのか。そこまで考えることで、子どもたちとの繋がりを深いものにできると活動を通して感じました。毎年この学習支援に参加していると、次の年に必ず私の顔を覚えてくれていた子どもたちがいるということが一番の喜びです。表面上だけのかかわりではなく、子どもたちと温かな繋がりを築けていたのではないかと考えています。このように、AMAUTA の子どもたち自身は自分の将来について考え、また学生自身も子どもたちとの交流を通して何かを学ぶ、そんなお互いに刺激しあえる関係性を築く場として、今後もこの活動が続いてほしいと思います。



学びの教室 私が出来る小さなこと

宇都宮大学国際学部2年 中澤 咲

・「学びの教室」に参加したきっかけ

私は、2年生の前期までは外国人児童生徒支援のための活動に参加したこともHANDSに関わったこともありませんでした。しかし、「学びの教室」のようなボランティア活動は入学当初から気になっていました。そのときはまだ参加すると言うほどではなく、凄いことやっているんだなと感心する程度でした。しかし、「グローバル化と外国人児童生徒教育」という授業を受講し、受け入れ態勢が整っていないために苦しんでいる児童や生徒がこの日本にも想像以上に存在していることに衝撃を受けました。そして児童生徒の支援をする団体は有るにはあるがまだまだ支援が行き届いていないということを知り、何か出来ることはないのかと考えるようになりました。ただ、その時はまだこの活動に参加するということはあまり考えてはいませんでした。それは、自分が行っても状況が好転するわけではないという諦観と、小学生や中学生という感受性の強い時期に、まだ社会人にもなっていない自分が関わることで、もし子どもたちに何か良くない影響を与えてしまったら、という不安から参加にしり込みしていました。

しかし、なぜ参加することを考え始めたのかというと、単純なことで、参加している友人が楽しそうだったからです。その友人は、教えていた子どもたちからテストの点が上がったとか志望校に合格したとかいう報告を受けると、「やって良かった、自分でも少しはその子の力となれたんだ」という充足感を感じると教えてくれ、活動への関心が高まりました。

また私の参加の決意をもうひと押ししたことがありました。それは留学生の友人の授業のノートを見たときでした。そのノートは日本語が間違えていたり、重要な点が抜けていたりしていたの

です。その友人は母国でも日本に来てからも日本語の学習にずっと励んでいたらしく、実際のところ日常ではほとんど苦労していないように見えました。しかし、授業ではやはり日常にはない語彙が使われますし、わからなくても瞬時に聞き返せないですし、このように授業では置いていかれてしまうことがしばしばあると話していました。日本語での会話はほぼ完璧なこの友人でさえもこんな苦しみがあるのなら、外国人の児童生徒の子どもたちはもっと苦しんでいるのではないのかと思いました。この時になって初めて、子どもたちに自分に出来ることをしたいと強く考えるにいたり、参加したのです。

・活動を通しての見解

初めて「学びの教室」に参加したときはどう子どもたちに接するべきかと、緊張していました。私がおの日担当したのは中学一年生の女の子で、あまり日本語が話せない様子でした。特に難しいのは漢字や漢字の熟語の意味で、日本語で説明してもわからず英語で説明したらやっとわかる、というような様子でした。学校での授業ではなかなか先生は一人の生徒について説明することは難しいようで、ますます授業についていくのが大変になってしまったと感じました。しかし、私が担当した女の子はもちろん、他の



「小山市学びの教室」での本学の学生による学習支援の様子(2016年12月17日、小山市初期指導教室「かけはし」にて)

II 活動報告

参加していた子どもたちはみんな説明を理解しようと一生懸命で、一度わかると覚えも理解も早く、決して勉強が苦手なわけではないのだと感じました。そして、言語の壁がなければ本当はもっと良い成績を取れるのに、と歯がゆく思いました。

参加して一番感じたことは、自分の働きは微々たるものでも確実に子どもたちの助けになっているという実感です。参加前は自分が参加しても

しなくてもさして大きな変化はないと思っていましたが、多少なりとも良い変化をもたらせたと思います。また、言語の壁はまだ厚く高い、ということも強く感じました。理解する力は十分に持っているのに、日本語があまりよくわからないせいで自信を無くしてしまったり、機会を逃してしまったりすることは本当に切ないことです。この活動で、私はこのような子どもたちを少しでも減らせていけたら、と強く思いました。

真岡市での「イヤーエンドパーティー」に参加して



宇都宮大学国際学部1年 染谷 心

12月10日(土)、私は真岡市二宮コミュニティセンター内の真岡市生涯学習館で開催されたイヤーエンドパーティー2016に参加しました。このイベントは真岡市国際交流協会が毎年開催しているもので、真岡市在住の外国人と市民のふれあいを趣旨としています。今回宇都宮大学からは、学生4名、留学生5名、職員・一般等3名が参加し、とても楽しい時間を過ごすことができました。

パーティーでは、参加者によって持ち寄られた各国の料理やお菓子がふるまわれ、参加者は、1品につき100円で好きな料理を選び、買って楽しむことができました。料理は、おにぎり、そば、赤飯などの日本料理、アルファホール、カウサ・レイェナ、エンパナーダなどのペルー料理、ミックスサルガドス、バステル、パテ・マヨネーズなどのブラジル料理がありました。ほかにも、中国料理、フィリピン料理があり、世界各国の様々な料理を楽しむことができました。

さらにこのイヤーエンドパーティーでは、日本舞踊、サンバ演奏、ペルーの民族舞踊、さらにはハワイアンダンスなど各国の伝統的な踊りや演奏が披露され、それぞれの国の文化を肌で感じる事ができた貴重な時間でした。特に、外国に

ルーツを持つ子供たちによるダンスの発表はとても完成度が高く、一番印象に残りました。

また私たち宇都宮大学の参加者も出し物として、“WE WISH YOU A MARRY CHRISTMAS”を男声パート、女声パートに分かれて歌いました。そしてパーティーの最後には、留学生のシルバさんがアンジェラ・アキの「手紙」をとってもきれいな歌声で披露し、たくさんの拍手をいただきました。

たくさんのおいしい料理と各国の踊りなどを楽しみながら、とても充実した時間を過ごすことができました。またこのような機会があれば、ぜひ参加したいです。



“WE WISH YOU A MARRY CHRISTMAS”を披露する宇都宮大生や留学生たち

事務局だより

平成28年度の活動

- ・授業科目「グローバル化と外国人児童生徒教育」開講（後期）
- ・外国人児童生徒教育推進協議会（栃木県教育委員会 後援）
第1回：9月13日、第2回：1月20日
- ・外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣（通年）
- ・真岡市外国人児童生徒支援のための学生ボランティア夏期集団派遣（7/28、7/29、8/5、8/25）
- ・子ども国際理解サマースクール：8月8日～9日（宇都宮市東生涯学習センターとの協働）
- ・小山市学びの教室外国人生徒支援のための学生ボランティア派遣
第Ⅰ期：8月20日～11月19日全7回、第Ⅱ期：12月3日～3月4日全7回
- ・多言語による高校進学ガイダンス
本学：10月22日（本学学生会館）
*後援：宇都宮市教育委員会・栃木県国際交流協会・宇都宮市国際交流協会
栃木市：10月1日（栃木市役所正庁）
*共催：栃木市教育委員会
- ・ニューズレター『HANDSnext』第22号の刊行：2月7日
- ・外国人生徒進路調査（第7回栃木県）：3月～
- ・国際理解教育の実践：9月30日（栃木県立学悠館高等学校）
- ・真岡市国際交流協会「イヤー・エンド・パーティー」での外国人児童生徒との交流：12月10日
- ・高校生向けプログラムにおける学生団体「HANDS Jr」による外国人児童支援活動発表：12月10日（JICAつくば）
- ・外国につながる学生の農家民泊交流事業：8月22日～26日（大田原市内にて、主催さほうと21への協力）

関係機関からのお知らせ



授業に役立つ！JICA国際理解教育支援事業のお知らせ

- ・児童・生徒向けプログラム
- ・国際協力出前講座
- ・JICA 筑波施設訪問プログラム
- ・国際協力中学生高校生エッセイコンテスト
- ・高校生国際協力実体験プログラム
- ・世界の笑顔のためにプログラム

教員向けプログラム

- ・教師海外研修
- ・国際理解教育実践セミナー
- ・現職教員特別参加制度
- ・お役立ちサイト

【お問合せ】 J I C A 栃木デスク（とちぎ国際交流センター内） 028-621-0777
jicadpd-desk-tochigiken@jica.go.jp まで、お気軽にご相談ください！

HANDS next とちぎ多文化共生教育通信 第22号

2017年2月7日発行

発行：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDSプロジェクト部門

（代表：田巻松雄）

事務局：〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（担当 船山千恵）

TEL/FAX 028 (649) 5196 E-mail funayama@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

印刷：鈴木印刷株式会社 〒321-0901 栃木県宇都宮市平出町3751-11